

長沢芦雪の応挙入門前後の画風展開——新出の「于緝」落款作品を中心に——

岡田 秀之 (MIHO MUSEUM)

長沢芦雪（1754-99）が円山応挙（1733-95）に入門した時期は不明だが、天明元年（1781）年作の「猛虎図」（現在行方不明）や翌年作の「美人図」（個人蔵）などから、20代後半には写生を重視した表現や、繊細な筆使いによる応挙様式を習得したと考えられている。

芦雪の応挙入門以前の号が「于緝」であることは、『円山四条派落款印譜』（1915年刊）や1918年に相見香雨氏が紹介した竹川友広氏の談話によって知られていた。その後、1963年に山川武氏が京都淀の旧家を訪れた際、「于緝之印」を捺す「群鶴図」と「蛇図」を初めて確認した。この2作品は、芦雪が幼少期を過ごした地に伝わったことや、両図の画面構成や筆法の未熟さから、応挙入門以前の作と考えられている。しかし、上記「群鶴図」と「蛇図」と応挙入門後の芦雪作品との比較による応挙入門前後の画風展開については、これまで十分に考察されたことはなかった。

発表者は上記「于緝之印」のある2作品を熟覧する機会を得るとともに、新たに「于緝」という署名を有する「関羽図」（紙本墨画淡彩）と「雪梅叭々鳥図」（絹本淡彩）（ともに個人蔵）を発見した。

まず、「関羽図」（個人蔵）は「于緝写」という署名と白文方印（印文不明）があり、岩に座る関羽と、画面上方に小さな水の流れを描く。また、極端に肥瘦のある衣紋線は、明時代末の中国絵画などからの影響が想定されるが、単なる模倣ではなく、衣の動きを表すという墨線本来の機能よりも、滲みの効果に重点が置かれている。このような特徴は、応挙入門以後天明6年（1786）頃制作の「隻履達磨図」（豊橋市美術館蔵）や「関羽図」（個人蔵、和歌山・徳泉寺）の水墨作品に共通する。

次に、「雪梅叭々鳥図」（個人蔵）は画面右に「于緝写意」という署名とその下に上記「群鶴図」と同じ「于緝之印」・「子熙」を捺す。図様は画面左下から右上へと画面を斜めに横断する梅の幹に2羽の叭々鳥がとまり、画面下には薔薇を描く。梅の幹に積もる雪を彩色せず、白く抜く表現や枝に対して大きく描かれた叭々鳥の姿には、南蘋派の作品からの強い影響が指摘できる。また、本図に描かれたのと同じ着色の薔薇が、天明5年（1785）頃の制作と考えられる「人物花鳥図巻」（京都国立博物館蔵）、「花鳥図屏風」（株式会社千總）、天明6年末から滞在した和歌山南部で描いた「薔薇に鶏・猫図襖」（和歌山・無量寺）にも描かれている。

以上のような、新出作品2点を含む「于緝」落款作品にみられる墨線に対する志向や南蘋派の画風が、応挙入門以後の水墨画と着色画の画風に影響を及ぼしたことを指摘したい。